

中国語の方位詞「上」と日本語の「うえ」の意味と機能について —空間的用法を中心に—

陳 瑞英

アブストラクト

本稿は、中国語の方位詞「上」と日本語の「うえ」の、空間的用法における共通点と相違点について考察したものである。共通点は、「上」と「うえ」は共に「高いところ」という意味を持ち、その方位連語「X上」と「のうえ」は、共に「ある物体の上方」という意味を有する点である。一方、相違点は以下の4点にまとめられる。①「うえ」は格助詞を伴って単独で名詞のように用いられるのに対し、「上」は普通単独に用いることはない。②「上」と「うえ」は、共にモノ性の名詞をトコロ性の名詞に転換させる機能を持っているが、その転換においては、中国語の場合は、モノ性の名詞の後ろに「上」を後置させることが必要不可欠であるが、日本語の場合は、「のうえ」は不要な場合がある。③「X上」も「のうえ」も、共に「物体の表面」という意味を持っているが、その使用範囲には相違が見られる。④「のうえ」は、「X上」に見られない「表面に出る方、外側」という意味を持ち、また、トコロを具現化、明確化する機能、対比や強調という機能を持っている。

キーワード： 方位詞、上、うえ、意味と機能、空間的用法

1. はじめに

中国語の方位詞は大きく単純方位詞と合成方位詞の二種類に分けられ、位置や方角を表す。単純方位詞のうち、結合能力が最も強いものの一つに「上」がある。意味が通じさえすれば、任意の名詞の後ろにおいて方位連語を作ることが可能である（朱 1982）。また、方位連語「名詞＋上」（以下、「X上」と称する）は、「物体の最上部」または「物体の表面」という意味のほか、「上方、事物の範囲、ある方面」などの意味も持っている（呂 1999）。一方、日本語の「うえ（上）」には、名詞として「高い方向、高い位置」という意味のほか、「物の上方の面、物の表面、表面に出る方、外側」などの意味も備わっている（松村 2007）。

このように、日中両言語は共に「上」という漢字を使い、しかも文字上の意味もよく似ているので、中国語を母語とする日本語学習者は、しばしば中国語の「X上」を日本語の「のうえ」と直訳してしまい、不自然な日本語を作ってしまう。その代表的な誤用例には以下のようなものがある。

- | | |
|----------------------------|---|
| (1) 爷爷坐在 <u>椅子上</u> 看电视。 | { 誤：おじいちゃんは椅子の <u>上</u> に座ってテレビを見る。
正：おじいちゃんは椅子 　に座ってテレビを見る。 |
| (2) <u>电线杆上</u> 贴着很多海报。 | { 誤：電柱の <u>上</u> にポスターがたくさん貼ってある。
正：電柱 　にポスターがたくさん貼ってある。 |
| (3) <u>天花板上</u> 悬挂着一盏吊灯。 | { 誤：天井の <u>上</u> にシャンデリアが吊るしてある。
正：天井 　にシャンデリアが吊るしてある。 |
| (4) 你的 <u>脸上</u> 粘着米粒呢。 | { 誤：顔の <u>上</u> にご飯粒がついているよ。
正：顔 　にご飯粒がついているよ。 |
| (5) 她从 <u>地板上</u> 捡起了那张报纸。 | { 誤：彼女は床の <u>上</u> からあの新聞紙を拾い上げた。
正：彼女は床 　からあの新聞紙を拾い上げた。 |

一方、日本語を母語とする中国語学習者によく見られる間違いには、次のようなものがある。

- | | |
|-------------------------|---|
| (6) A: 食事は? B: 飛行機で食べた。 | { 誤：A: 你吃饭了吗? B: (我) 在 <u>飞机</u> 吃了。
正：A: 你吃饭了吗? B: (我) 在 <u>飞机上</u> 吃了。 |
|-------------------------|---|

◇上有老，下有小。(上には両親、下には子どもたちがいる。)

◇朝上看。(上を見る。)

◇从上往下看。(上から下を見る。)

一方、大辞林(第3版)によると、日本語の「うえ」は、名詞として「高いところ、高い位置」という意味を持っている。また、中日辞典(第2版)では次の例文が挙げられている。

◇うえのほうを探してごらん。(往上找一找。)

◇うえへうえへへと積み重ねる。(一层一层地往上堆。)

◇うえから押してぎゅうぎゅうに詰め込んだ。(由上往下压，压得鼓鼓的。)

◇うえの棚には酒を並べる。(把酒摆在上面的架子上。)

◇このうえは物置になっている。(这上面儿是堆房。)

◇うえから順にとってください。(由上边儿顺着拿。)

上記の例文から分かるように、日本語の「うえ」は、空間的に位置の高いところを表し、格助詞を伴って名詞のように用いることができるといえる。「うえ」に対応する中国語訳は、「上」となっているが、「上」の前にすべて「往」や「由」などの「介詞」が前置されている。つまり、「介詞」が前置されないと、「上」一文字で単独のままでは使いにくいという特徴が見られる。また、「うえの棚」「このうえ」に対応する中国語は、「上的架子」「这上」ではなく、「上面的架子」「这上面 (这上边儿)」であり、合成方位詞の「上边儿、上面」になる。

3. 場所語、場所格および語性転換

3.1 中国語における場所語と「上」による語性転換

「存在」を表す構文はいずれも場所を表す語と深い関係がある。場所語とは、i 介詞(往、到、在、由…)の後ろにおいてその目的語とすることができる、ii 「哪儿」(どこ)という疑問詞で尋ねることができる、iii 「这儿(ここ)、那儿(あそこ)」に代えることができる語と定義されている(朱 1982)。この統語的な観点に基づき、中国語の場所語は次の三種類に分けることができる。

I 類 トコロ性を本来的に有する語

◇地名・国名 日本(日本)、東京(東京)、上海(上海)……

◇合成方位詞 上面(うえ)、东边(東)、下边(下)……

◇指示代詞 这里(ここ)、那儿(あそこ)、哪儿(どこ)……

II 類 トコロ性を含む語

◇家(家)、机场(飛行場)、食堂(食堂)、车站(駅)、图书馆(図書館)、操场(運動場)、邮局(郵便局)、办公室(事務室)、宿舍(宿舍)、商店(商店)、厨房(台所)……

III 類 トコロ性が薄く、名詞のみではところ性を有さない語

◇椅子(椅子)、桌子(テーブル)、书架(本棚)、床(ベッド)、沙发(ソファ)、窗户(窓)、天花板(天井)、墙(壁)……

I 類に挙げられた地名や国名、合成方位詞、指示代詞などは、本来的にところ性を有するもので、動詞または介詞「在、到、往」などの目的語となりうる。

II 類に挙げられた語は、意味的に「建物」と「場所」という両方の性質を併せ持っている。例えば、「学校」という語をみると、

(9) a 建造学校。(学校を建てる。) (タテモノ、モノ)

b 在学校等候。(学校で待ち合わせする。) (トコロ)

(9 a) の「学校」は、「建てる」という動作の対象であり、モノとなるが、(9 b) は、人間の活動空間座標の一点として捉えられ、トコロとなる。

Ⅱ類の語は、トコロを表す意味が含まれていて、日常生活の中で「ある確定した場所」と認識できるため、場所語として使う場合は、「上」や「里」などの方位詞の省略が可能な場合がある。

Ⅲ類に挙げられた語は、固有性とトコロ性が共に薄く、単独で使用する場合は単なるその物体としての意味しか持たない。「椅子(椅子)」や「书架(本棚)」「牆(壁)」などは、あくまでもそのモノである。これらのモノが、「座る」「置く」「貼る」といった動作の行われる場所を表すためには、モノ性の名詞からトコロ性の名詞への語性転換が必要である。方位詞「上」はモノ性の名詞をトコロ化する文法的な機能を持っているため、「椅子上」「书架上」「牆上」のように、トコロ名詞へと転換されるわけである。

I類 他在中国学习。(彼は中国で勉強する。) (「上」は必要なし)

Ⅱ類 他在图书馆(里)学习。(彼は図書館で勉強する。)(「上」や「里」など方位詞は省略可能)

Ⅲ類 他在床上学习。(彼はベッドの上で勉強する。)(「上」は必要)

3.2 日本語における場所語と場所格及び「うえ」による語性転換

3.2.1 日本語における場所語と場所格

では、日本語における場所語はどういうふうに定義されているだろうか。

名詞のトコロ性を検証する文法的方法としては、i ここは～だ、ii ～へ行く、iii ～で～した、というワクがあると提示されている(寺村 1968)。これに基づけば、例えば、「ここは大阪だ」とはいえても、「これは大阪だ」とはいえないことになる。よって、「大阪」はトコロ性の名詞といえる。反対に「これはコップだ」とはいえるが、「ここはコップだ」とはいえない。よって、「コップ」はモノ性の名詞といえる。「図書館」という語は、「これは図書館」でも「ここは図書館」でも通じるので、モノ性とトコロ性の両方の性質を併せ持つものである。

森田(2002)は日本語の語性の観点から、事物の存在する場所を表すものには、「部屋、庭、運動場、海、麓、沖、道、駅、どこ」などがあり、事物の在り処を指示するものには、「上、下、中、左、右、外、内、前、奥、そば、傍ら、向こう、以内」などがあるという。

一方、場所と場所格については、『現代日本語文法』(2009)では、次のように記載されている。場所とは述語で表される事態が成立する位置であり、主として、場所を表す格「ニ」と「デ」によって表される。

上記の観点に基づき、下記の例文を通して、日本語の場所語と場所格の意味役割を見てみる。

(10) 教室に学生がいる。(存在の場所)

(11) 競技場で競技を行う。(動作や出来事などの成立する場所)

森田の語性観点に基づけば、(10)の「教室」は、「学生が存在する、勉強する」という場所として強いトコロ性を持つ語といえる。「教室」の後ろに、「ニ」格を付加することにより、「教室」は学生の存在する場所としてトコロという語性が明確にされることになる。では、(10a)と(10b)はどうだろうか。

(10) a 花を教室に飾る。

b 教室を花で飾る。

一見して、両方共、「飾る」という動詞があり、「花」と「教室」という二つの単語が入れ替えられただけであるが、(10a)の場合は、「教室」は花の飾られるトコロとしての把握、(10b)の教室は「花」という道具(材料)を使って、飾る対象——モノとしての把握となる。両者の間に認められる意味の差について言えば、(10a)では「飾る」行為による影響は部分的であり、(10b)ではその影響は全体的である(池上2000)と感じ取れよう。

(11)の「競技場」という語は、競技やスポーツを行う場所であり、その後ろに動作を表す「デ」格をつけることにより、競技が行われるトコロとして確定される。下記の(11a)の「競技場」は、「一周する」という通過の意味を持つ動詞と組み合わせため、通過の域を表す「ヲ」格が必要となる。一方、(11b)は、同じ「ヲ」格を使っているが、果たす役割は同じではない。(11b)の「競技場」は「壊す」という他動詞と組み合わせため、「壊す」の働きかけの対象となり、モノとなる。

(11) a 競技場を一周する。(トコロ)

b 競技場を壊し、駐車場にする。 (モノ)

以上の例からわかるように、「教室」「競技場」などのようなトコロ性の強い語であっても、ほかの語との共起の様相により、または、その後に付加する格助詞により、語性が転換され、モノ性の名詞として把握されることもある。

一方、モノを表す名詞には、位置概念や場面意識を持つ語が多いとされている(森田 2005)。例えば、

(12) a 部屋に本棚を置く。 (モノ)

b 本を本棚に置く。 (トコロ)

(12a)と(12b)の構文は共に、「本棚」と「置く」という単語があるが、本棚の後ろに付加する格助詞の違いにより、「本棚」は違う語性として表されている。「本棚を置く」となれば、「本棚」は置かれる対象―モノ―となるが、「本棚に置く」となれば、「本棚」は何か置かれるトコロとして捉えることができる。このように、文法的に重要な役割を果たす格助詞により、「本棚」と「置く」との間の意味関係が明確にされることとなる。

このように、「本棚」は、文法的な観点からは「これは本棚だ」といえるように、人間にとってはモノであるが、その一方で、「この本を棚に置いてください」ともいえるよう、本にとってはトコロとなる。日本語におけるトコロという概念は、きわめて人間を中心にして設定されたものであり(荒川 1992)、モノ性名詞とトコロ性名詞の概念的な対立がそれほど明確ではない(池上 2000)といえる。

3.3.2 「うえ」による語性転換

(13) 道を歩く。 (通過する範囲)

(14) 本は棚から落ちた。 (移動の起点)

(13)の「ヲ」格は通過域を表し、「道^を歩く」「公園を走る」「川を泳いで渡る」のように使うことができる。しかし、「氷を歩く」「雪を走る」「ワイヤを歩き渡る」とは言わない。一般的な認識では、「氷」や「雪」「ワイヤ」はモノ性の名詞であり、「歩く」「走る」「歩き渡る」トコロとしては認識されていない。そのため、これらのモノ性の名詞をトコロとして使う場合は、トコロ指示語「うえ」を付加する必要がある。「氷のうえを歩く」「雪のうえを走る」「ワイヤのうえを歩き渡る」というように言わねばならない。

(14)の例文及び(7)の例文における「落ちる」という動詞は、「上の方から下の方へ、自然の力によって位置が変わる」という意味を表している。また、「棚」や「ベッド」は、モノ性の名詞とされている一方、書籍の保管場所、または、人間の寝る場所として認知されている。したがって、これらの語の後ろに物が移動する場所の起点を表す「カラ」格を付加することにより、トコロとして把握することができよう。わざわざ「棚のうえから」「ベッドのうえから」といわずとも、「棚から落ちた」「ベッドから落ちた」だけで十分である。なお、「棚のうえから落ちた」といったら、「棚の一番高いところから」という意味合いが強く感じられるだろう。

一方、中国語における「棚」や「ベッド」は、Ⅲ類のモノ性の名詞に分類されているため、認識的にトコロ性が含まれていても、トコロ名詞として使う場合は、「上」によるトコロ化をしなければならない。したがって、(7)の「子供がベッドから落ちた」という文を中国語に訳すときには、「从床上…」のように「上」をつける必要がある。

(15) a 布団で遊ぶ。 (道具、手段)

b 布団のうえで遊ぶ。 (行為の場所)

「布団」はモノとして分類されるから、(15a)の「布団で遊ぶ」といったら、「デ」格は話者の認識として道具格として働いていて、「布団に包まってミノムシになったりして遊ぶ」といったような意味に取られることもあろう。もし、モノ性の名詞の「布団」を場所語として捉えようとするならば、(15b)の「布団のうえで遊ぶ」のように言い換えなければならない。それによって、格助詞の意味は「道具・手段」から「行為・作用」の行われる場面が変わる。

このように、日本語の「うえ」はトコロ指示語として、モノ性の名詞をトコロ化する機能を持っているといえる。

4. 方位連語「X上」と「のうえ」の意味と機能

中国語の方位連語の一つに、「名詞(X) + 上」がある。例えば、「树上(木のうえ)」「山上(山のうえ)」「桌子上(机の

上)」などである。日本語の「のうえ」に対応する場合があります、両者の共通点と相違点を比較する。

4.1 「物体の上方」の意味

中国語の「X上」における「上」は「上方」、「X上」は「非密閉性の立体的な空間範囲」を表す(童2006)。一方、日本語の「のうえ」も、「物体の上方」という意味を持っている(松村2007)。

(16) 飞机在头上盘旋。(飛行機は頭のうえを飛び回っている。)

(17) 海鸥在海上飞翔。(カモメは海の上(海面上)を飛んでいる。)

この用法においては両者には相違がほとんど見られない。

4.2 「物体の表面」の意味

上述したように、方位連語「X上」は、「物体の最上部あるいは表面」の意味を持っており、日本語の「のうえ」は、「ある物の上方の面、ある物の表面、表面に出る方、外側」の意味を持っている。両方とも「物体の表面」という意味を持っているが、微妙な違いもある。

(18) 请把桌子上的书递给我。(机のうえの本をとってください。)

(19) 在雪上行走。(雪のうえを歩く。)

(20) 山上开满了野菊花。(山(のうえ)に野菊の花がいっぱい咲いている。)

(21) 墙上贴着一张照片。(壁に写真が一枚貼ってある。)

(22) 天花板上悬挂着一盏吊灯。(天井にシャンデリアが吊るしてある。)

一般的な認識上、(18)の「机」と(19)の「雪」は平面的なもので、(20)の「山」は勾配のあるもの、(21)の「壁」は地面に垂直なもの、そして(22)の「天井」は頭の上に位置するものと考えられている。「机」「雪」および「山」のように空間的な上方の面を目で捉えるものについては、「上」と「うえ」の間に相違は見られない。

(22)の「天花板上」は、「天井」のトコロ化された方位連語で、「天井の表面」の意味である。中国語を母語とする日本語学習者は「天井のうえ」と直訳しがちであるが、日本語の発想では、私たちに見えるのは天井板の「下方」の表面であり、「天井のうえ」といえば、天井板の表面ではなく、「天井板の裏側」になるので、「天花板下悬挂着一盏吊灯。」といわなければならないと思われるだろう。同様に(21)の「墙上」は、文字通りに訳すと「壁のうえ」になり、おかしな日本語になってしまう。これを無理に理解しようとすれば、「壁の上方」または「猫が歩くような壁の上部の狭い部分」といった意味にでもとられるだろう。このように、日本語の「のうえ」が持つ「物体の表面」とは、あくまでも空間的に「物体の上方の表面」が捉えられる場合に限られていて、「天井」や「壁」のような、認識上「物体の上方の表面」が捉えられないものには適用されないと見られる。

一方、上記の中国語の例文からわかるように、「X上」の持つ「物体の表面」の意味は、「机」のような「物体の上方の表面」が捉えられるものはもちろん、「山」のような「傾斜面」のもの、「壁」のような「垂直側面」のもの、さらに、「天井」のような「下方の表面」しか捉えないものまで含まれているのである。その適用範囲の相違が、日中間の誤訳の原因となっていると考えられる。

では、なぜ、中国語における「X上」の「上」は、物体の形状や空間的特性と関係なく、その物体の表面を表すことができるだろうか。童(2006)では認知的な視点から、「上」は、もともとある目的物が(X参照物に対して)位置の高いところにあることを表すとし、X参照物の上方にある目的物には、地球引力による地面に垂直な重力が働き、往々にしてX参照物と接触し、附着の状態になる、徐々に「上」は「位置の高いところ」という意味の要素が薄れ、「+接触、+附着」という要素のほうが目立つて現れてきたと述べ、現在では「+接触、+附着」が方位詞「上」を使用する際の使用条件となり、X参照物は被附着物となってきたと、説明している。つまり、X参照物の形状や空間的特性に関係なく、目的物とX参照物が「接触、附着」すれば、「X上」の「物体の表面」の意味が成り立つと解釈できよう。

また、方位連語「X上」においては、「身体部位名詞+上」の用法もある。

(23) a 脚上起了一个泡。(足にまめができた。)

b *脚下起了一个泡。(*足の下にまめができた。)

C 脚板上起了一个泡。(足の裏にまめができた。)

(23a)の「脚上」は、足の裏になるかもしれないし、足の指の間になるかもしれない。とにかく足のどこかの皮膚の表面を指している。また、例えば「足の裏」を強調したい場合は、(23b)のように「脚下(足の下)」とは言わず、(23c)のように「脚板上(足の裏に)」ということになる。なお、(4)の「你的脸上粘着米粒呢」における「脸上」は、同様に「顔の表面」「ほっぺ」を指している。

このほか、中国語では「心上」「面子上」「手头上」などの身体関連連語もあるが、多くの場合、「上」は実質的な意味がなく、抽象概念を表すとされている。

4.3 「X上」における「乗り物名詞+上」の意味

方位構造「X上」におけるもう一つの用法に「乗り物名詞+上」がある。例えば、

- (24) 公共汽车上挤满了乘客。(バスは乗客でいっぱいだった。)
- (25) 他在飞机上看电视。(彼は飛行機の機内でテレビを見る。)
- (26) 人力车上坐着一位年轻女孩儿。(人力車には若い女の子が乗っている。)
- (27) 优胜队站在敞篷花车上进行巡游。(優勝チームはオープンカーに立ってパレードをする。)
- (28) 孩子们坐在雪橇上尽情地玩雪。(子どもたちはソリに乗って、思い切り雪遊びを楽しむ。)

(24)の「バス」と(25)の「飛行機」はいずれも容器型の乗り物で、これらの名詞だけでは、そのものしか表せない。方位詞「上」を後置し、「汽车上」と「飞机上」にすることで、モノ名詞からトコロ名詞へ変わる。この場合、「汽车上」「飞机上」とは、「バス」や「飛行機」の屋根を指すのではなく、人間が存在する「バスの中」「飛行機の中」という密閉的な空間を指している。したがって、(6)の「飛行機で食べた」という中国語訳は、「在飞机上吃了」となる。

一方、(26)の「人力車」と(27)の「オープンカー」は密閉されていない乗り物であり、また(28)の「ソリ」は人間の視線より下方の位置にある乗り物である。これらの乗り物を表す名詞に、方位詞「上」を後置させると、「その乗り物の空間」または、「その乗り物のうえ」という意味になる。なお、内部空間を表す方位連語に「X里」もあるが、「X上」と「X里」の相違については、ここでは論じない。

このように、「X上」の「上」は、乗り物名詞をトコロ化する働きを持っているといえよう。

4.4 「のうえ」における「外側」の意味

- (29) a *壁のうえに地図が貼ってある。
- b 既存の壁のうえから外壁工事をする。
- c 塗り壁のうえに合板を貼る。

4.2でも述べたが、(29a)「壁のうえに地図が貼ってある」といったら、「壁の表面」という意味として捉えられず、不自然な日本語と感じられるのだろうが、(29b)と(29c)なら、「壁の表面」という意味で認識されるのではないだろうか。なぜ、同じ「壁のうえ」という表現なのに、「壁」の違うトコロと捉えられるのだろうか。

日本語の「うえ」は、「表面に出る方」「外側」の意味も持っている。日本語で肌に直接着る衣類は「肌着、下着」といい、衣服を重ね着したときの一番上に着るものは「上着」といつている。これと関連しているように、「セーターのうえにコートを着る」における「うえ」は「外側」の意味になる。つまり、体を中心としてその外側に向かっていく方向を「うえ」と表現する。また、「風呂敷の上からさわってみる(隔着包袱皮儿摸摸)」は、風呂敷の外側から、という意味になるだろう。「壁のうえから外壁工事をする」では、既存の壁の中の材質(例えばコンクリート)に対して「その外側から」の意味と理解できるだろう。したがって、(29b)と(29c)の「のうえ」は、「物体の表面」というより、「外側」という意味の用法だといえる。

電子柱にポスターがすでに貼ってあって、「そのうえにも一枚貼ってくれ」といわれたら、どこに貼るだろうか。すでに貼ってあるポスターの上方のスペースに貼る可能性もあるだろうし、すでに貼ってあったポスターの上から貼る可能性もありえるだろう。これは、「うえ」の「地面から遠い方向」の基本的な意味から、「表面に出る面、外側」という派生的な意味になってきたとも考えられるだろう。

なお、日本語の「下着」と「上着」に対応する中国語は、それぞれ「內衣」(インナー)と「外衣」(アウトター)である。この相違のため、(8)「パジャマの上にセーターを着る」は「在睡衣的外面套件毛衣」と訳さなければならない。

4.5 「のうえ」の機能

4.5.1 トコロ化する機能

- (30) a 椅子に座る。
 b *椅子のうえに座る。
 c 椅子のうえに立って見物する。
 d 円形に並べた椅子のうえをぐるぐる歩く。
 e 椅子のうえであぐらをかく。
 f 普段全然歩けないおじいちゃんが、自分一人で椅子のうえに上ったんだよ。

椅子はモノであると同時に、座るところなので、「椅子のうえに座る」といわずに、「椅子に座る」だけで十分とされている。しかし、椅子は本来「座る」ところであり、「立つ」ところ、「歩く」ところ、「あぐらをかく」ところ、「上る」ところではないから、「椅子に立って見物する」では不十分で、「椅子のうえに立って見物する」のほうがより自然に感じられるだろう。また、「椅子を歩く」では通じず、「椅子のうえを歩く」といわなければならない。つまり、椅子は「座る」に対してはところであるが、「歩く」「立つ」「あぐらをかく」「上る」に対しては、モノとして機能しているので、この場合は、「うえ」を付加する必要があると考えられる。

これについて、森田(2005)では、日本語の名詞はどのような語と意味的に関係しあっていくかによって、同じ語でもモノとして作用したり、ところとしての性格を帯びたりする、それによって「上」の必要性が変わると述べた上で、日本語の発想を踏まえた意味論的な文法記述が求められると、指摘されている。

4.5.2 場所を具現化、明確化する機能

- (31) a 子供が二段ベッドから落ちた。
 b 子供が二段ベッドのうえから落ちた。

(31 a) では、子供が二段ベッドから落ちたことは分かるが、下の段なのか、上の段なのかは明確ではない。(31 b) の「二段ベッドのうえから」になると、上の段であることが分かり、「のうえ」により場所が具現化されることになる。

- (32) a 鍵はどこに置いた？
 b1 机に置いた。
 b2 机のうえに置いた。

(32 a) の「鍵はどこに置いた？」という質問に対して、(32 b1) の「机に置いた」という返事は、机以外のもの、例えば椅子や本棚に対していう場合であり、(32 b2) の「机のうえに置いた」は、「机の中」「机の下」に対していうと考えられる。「机の引き出しの中」なのか、「机の上」なのか、より具体的な場所を表すには、ところを指示する「のうえ」や「なか」が必要となろう。「机のうえに置いた」における「のうえ」は、より具体的な方角や位置を表し、「に」はその方角や位置を文法的に表している。この二つの形式が相助け合うような形で一つの構文的役目を果たしているといえよう。

- (33) a 椅子で逆立ちをする。
 b 椅子のうえで逆立ちをする。

日本語においては、一つの格助詞がいくつかの意味役割を持つことがある。また、格助詞だけでは、意味を確定できない場合もある。例えば、(33a) の場合は、椅子を道具として逆立ちをするなら「椅子」はモノとなり、「で」は道具格となるが、椅子の上で逆立ちをするなら、「椅子」はところとなり、「で」は場所格となる。もし、椅子をところとして明確にしたい場合は、椅子の後ろに「のうえ」を付加し、「椅子のうえで逆立ちをする」といえばよい。

このように、「のうえ」は、場所を具現化し、明確化する機能を持っているといえる。

4.5.3 対比、強調機能

「日本語では人の体が存在する平面が起点の役割を務めるときに、「のうえ」を使ってはいけない」という張の論点に対し、趙(2008)は(34)の例文をあげ、「対比」の意味を強調したい場合は、その限りではないと指摘している。

(34) 地面の上からはねずみが、下からはもぐらが、お芋を引っ張り合っていた。(『ねずみのえんそくもぐらのえんそく』より)

この文においては、「地面の下から」というもぐらの動作と、「地面の上から」というねずみの動作とを対比的に表現するため、人の体が存在する地面が起点の役割を務めるにもかかわらず、「のうえ」を使っている。

- (35) a ベッドで遊んではいけない。
b ベッドのうえで遊んではいけない。

「ベッドは寝るところで、遊ぶところではない」「寝る場所は清潔であって欲しい」「ベッドという高いところで遊んだら危ない」などの気持ちを強調したい場合は、(35a)よりも、(35b)のように「うえ」をつける方が、より確実にその気持ちを伝えることができるのではないだろうか。

5. まとめ

中国語の方位詞「上」と日本語の「うえ」の、空間的用法における共通点と相違点について考察した。共通点は、「上」も「うえ」も「高いところ」という意味を持ち、その方位連語「X上」と「のうえ」は、共に「ある物体の上方」という意味を有する点である。一方、相違点は以下の4点にまとめられる。

①「うえ」は格助詞を伴って単独で名詞のように用いられるのに対し、「上」は普通単独に使われることはなく、「下」と呼応する対句的な慣用構造となるか、または、「介詞」の前置が必要である。

②「上」と「うえ」は、共にモノ性の名詞をトコロ化するという語性転換機能を持っているが、そのトコロ化への転換においては、中国語の場合は、モノ性の名詞の後ろに「上」を後置させることが必要不可欠であるのに対し、日本語の場合は、文脈によって「のうえ」の後置が不要である。これは日本語の文法構造と関連していると考えられる。

日本語は膠着語に分類され、主に体言に格助詞などを膠着させることによって格を決定するという文法構造である。そのため、「のうえ」を後置させなくても、他の語との共起の様相によって、あるいはその語に付く場所格によって、トコロ語として把握できる場合もある。これに対し、中国語は孤立語で助詞を持たない言語であり、文法の基本原則は語順にある。日本語のような場所格がないため、モノ性の名詞をトコロ性の名詞として使う場合は、必ず方位詞を付加しそれをトコロ化する操作が必要である。つまり、モノ性の名詞は、日本語では場所格(文脈により「のうえ+場所格」)によりトコロ化されるように、中国語では、「上」の後置によりトコロ化する。位置(場所)が状況語になる文では、よく「在+名詞+方位詞(上)」という方位構文が使われるが、これは往々にして、日本語の「名詞+場所格(ニ/デ)」と対応している。「うえ」の使用頻度が中国語の「上」より低くなっている原因としては、日本語では相当数の名詞がそれ自体強いトコロ性を帯びている(趙2008)ことが挙げられているが、むしろ文法構造による影響が大きいと思われる。

③方位連語「X上」も「のうえ」も、共に「物体の表面」という意味を持っているが、その使用範囲には相違が見られる。中国語の「X上」は、ある目的物がX物体と「接触、附着」という条件を満たせば、X物体の形状や空間的な特性と関係なく全て適用できるのに対し、日本語の「のうえ」は、あくまでも認知的に「物体の上方の表面」が捉えられる物体の場合に限って使用されている。

また、中国語の「X上」においては、「身体部位名詞+上」「乗り物名詞+上」という用法がある。前者の「上」は多くの場合、実質的な意味はあまりなく、後者の「上」は、乗り物名詞をトコロ化する働きがあり、「乗り物の空間」または「乗り物の上」を意味する。日本語にはこれらの用法が見られず、トコロ名詞として日本語から中国語に訳すときには、「上」や「里」などの後置が必要となる。

④「X上」にはなく、日本語の「のうえ」にある特別用法として、「表面に出る方、外側」という意味がある。これは一種の派生的な用法と考えられる。こうした用法が派生した起源には、日本語の語感として「うえ」には「重ねる」「付け加える」といったニュアンスを内包していることが関連すると思われるが、別紙で論じたい。

また、日本語の「うえ」は基準となる他の事物との相対関係において意味が具体化する他律性を持ち（森田 2002）、具体的には、「のうえ」はトコロ指示語としてモノ性名詞をトコロ性名詞に転換させる機能、トコロを「具現化」「明確化」する機能、さらに、対比や強調という機能が備わっていると認められる。

以上のように、中国語の方位詞「上」と日本語の「うえ」の空間的用法において、共通点を持つ一方で、明確な相違と微妙な違いも混在している。今後は、その相違点の起源や本質の探究を進めながら、学習者にどのような指導方法を行うかを検討する必要があると考える。

参考文献

- 荒川清秀 (1992) 「日本語名詞のトコロ (空間) 性―中国語との関連で―」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版.
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』講談社.
- 倉石武四郎・折敷瀬興編 (2001) 『中日辞典』(第2版) 岩波書店.
- 松村明編 (2007) 『大辞林』(第3版) 三省堂編修所.
- 丸尾誠 (2004) 「中国語の場所詞について―モノ・トコロという観点から」『言語文化論集』Vol. 25, No. 2, PP. 151-166.
- 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』ひつじ書房.
- 森田良行 (2005) 『外国人の誤用から分かる日本語の問題』明治書院.
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法』くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12号, PP. 42-57.
- 張麟声 (2003) 『日本語教育のための誤用分析』スリーエーネットワーク.
- 『古代汉语字典』编写组 (2005) 『古代汉语字典』商务印刷馆.
- 吕叔湘 (1999) 『现代汉语八百词』(增订本) 商务印刷馆.
- 童盛强 (2006) 「也说方位词上的语义认知基础」『语言文字应用』No. 1, PP. 87-92.
- 趙銀平 (2008) 「日本空间名词“うえ”与汉语方位词“上”的对比研究」『苏州科技学院学报』Vol. 25, No. 3, PP. 125-141.
- 朱德熙 (1982) 『语法讲义』商务印刷馆.

謝辞 本稿の作成にあたり、貴重なアドバイスを頂いた山岡浩二先生、言語教育センター長の西川孝次先生、また有益なコメントを頂いた紀要編集委員の方々から感謝を申し上げます。また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた孔子学院の皆様へ感謝の意を表したい。

